

モニュメントと集合的記憶 ——交渉される記憶のダイナミズム——

土井冬樹（国立民族学博物館・神戸大学）

木村彩音（神戸大学・日本学術振興会）

前田 宙（神戸大学）

1. はじめに

記憶について議論したピエール・ノラによれば、ある集団がまとまりを持ち続ける為には、集合的記憶（アルヴァックス 2018（1925））の存在と、その記憶を保つためにそれを想起する「場所」が重要となる。その場所とは、博物館や墓地、モニュメントなど必ずしも記憶の出来事とは直結しない様々な場所やものを含んでいる。我々がそれらに価値を見出すのは、「自然な記憶はもう存在しないという意識」（ノラ 2002：37）があるからである。言い換えると、近代的な社会の発展に伴い変遷する歴史が一掃してしまう記憶を遺すことを目的に「記憶の場」は作り出されるのである。しかし、そうした記憶の場に紐づけられた集合的記憶は、変わらずに残り続けているのだろうか。

記憶という行為は、現在の立場から過去を再構成し、そのことによって未来に向けた行為を意味付ける作用を持っている（石田 2000：12）。東京大学の政治学者であった石田雄は、日本の同化主義や戦争責任について取り上げた『記憶と忘却の政治学』の序文でこう述べ、半世紀以上前のことを取り上げた自虐史観ではなく、未来にむけた行為として過去を再構成することの重要性を指摘した。本稿では、ハワイへの日系移民、オーストラリアやニュージーランドの先住民といった、主流社会に含まれず、統合の対象とされてきた人々を対象にする。そして、かれらの生活の場にある歴史に関連するモニュメントを一つの「記憶の場」と捉え、モニュメントが媒体となって想起させる集合的記憶がどのように交渉され、過去が再構成されたり継承されたりしているのか議論する。

2. 集合的記憶と場所

モーリス・アルヴァックスは、生きている人間を集団として一つにしているものは何かという問いに対し、「思い出」という共通点から「集合的記憶」を提起した。集合的記憶とは、言い換えれば集団の記憶である。アルヴァックスは、人々がまとまりをもつことができる基盤の一つとして、「思い出＝共通する記憶」を挙げ、記憶は社会が有する枠組みに支えられていると結論付けた（アルヴァックス 2018：12-58）。アルヴ

アックスのいう社会が有する枠組みとは、個人が所属している集団のことであり、さらには集団が互いに認識している共通知識のことである（安川 2008 : 296）。つまり、個人は家族、職場、社会階層、さらには宗教的共同体や国家といった様々な集団に属しているが、言語や習慣を習得する際にこれらの社会的枠組みが影響するように、個人が記憶を想起する際にも必然的にその影響を受ける、ということである。曖昧かつ、潜在的である記憶は、過去の経験を示す概念としてしばしば歴史研究と共に注目されてきたが、「記憶」と「歴史」は時に明確に区別されてきた。というのも、ホロコースト議論のように記憶は歴史となるのかが問われることや、曖昧でありながら個人の主観が強く出ることがあるからである。一方で、集合的記憶は、個人の主観はありつつも、それが集団によって共有されているものである。

このアルヴァックスの集合的記憶に続いたのが、「記憶の場」を議論したピエール・ノラである。ノラは、アルヴァックスの議論をフランスの文脈に落とし込む形で「記憶の場」プロジェクトを主導した。ノラもアルヴァックス同様に、歴史と記憶を対置させている。ノラのいう歴史とは、「変化の波にさらわれている為に忘却を運命づけられたわれわれの社会が、過去から作り出すもの」（ノラ 2002 : 30）であり、一方で記憶とは、社会の近代化と共に失われた原始社会のような「真の、社会的な、ありのままの記憶」（ノラ 2002 : 30-31）である。これを基盤に、ノラが表現するところの「歴史は加速している」状態、いわゆる歴史と記憶の距離が広がっている状況において、かれは記憶を想起する場所の存在を提起した。

場所と関連して記憶を論じるには、時間の捉え方に目を向ける必要がある。なぜなら、記憶がある場所と結びついているならば、その記憶を構成する時間がなんらかのかたちでその場所にとどめられていると捉えられるからである。野家は、時間が水平方向に流れ去っていくものではなく、「歴史を記述するわれわれ自身が内属する『現在』という横断面に、雪のように絶え間なく降り積もり続ける」ものであるとしたうえで、この積み重なった時間を過去として語る言語行為こそが想起であると述べた（野家 2005 : 183）。浜は、野家の議論をもとに「垂直に積み重なる時間」が、記憶としてモノや空間と結びつき、そこに沈殿していると捉えた。そのうえで彼はこの記憶と結びついた空間を「場所」と呼んでいる（浜 2010 : 468-469）。

また、トゥアンは、人が感覚、特に視覚を通じた空間の経験によって、そこに愛着や感情的なつながりを感じるようになるとした。こうして人を取り巻く空間は、その個人と特定の記憶を介した関係性を持つようになり、その記憶を蓄積する「場所」となる。「場所」は時間の流れの中の一点、つまり特定の記憶を留めるものとして機能するのである（Tuan 1977）。これらの議論を総合すると、時間は過ぎ去っていくものというよりも、積み重なるように蓄積されるものとして捉えることができる。そしてその容れ物が「場所」であり、そこに蓄積された時間の一部が記憶、それをある形式で切って取り出すことが想起であるといえる。

こうした記憶は、必ずしも固定的な場所のみに蓄積されるわけではない。アライダ・アスマンは、場所が文化の想起の空間を構築するうえで重要であると指摘し「場所は人工物に具体化されている個人や時代や文化の比較的短命な思い出を凌駕する持続も体現している」として、場所がより長期にわたる記憶の想起を可能にする重要な要素であるとしている（アスマン 2007：356）。ただし、場所の物理的環境の持続は問題にしていない。彼女は、ある場所の物理的な環境が破壊され、失われたとしても、場所の意味が言葉によって伝承され説明されることで、文化的記憶として想起、継承されるという（アスマン 2007：368）。ピエール・ノラも記憶を担う集団が存在しなくなり、僅かな過去の連続が残存する場を「記憶の場」と呼び（ノラ 2002：30）、それは物質的な場に限らず象徴としての場、機能としての場という三つの意味における場を含むと述べている（ノラ 2002：48）。そして、「記憶の場」を、「根底から変容し革新されつつある共同体が、技巧と意志をもって、生み出し、作り上げ、宣言し、また維持するもの」（ノラ 2002：37）と定義づけ、博物館、文書館や墓地、モニュメントなどを具体例に挙げている（ノラ 2002：37-38）。つまり、モニュメントなどは、物理的な場所に変わって時間の蓄積の容れ物としての機能を果たし、人々の記憶の想起を刺激するのである。

こうした記憶の場について、アスマンはそれを二種類に区別できるという。一方は、墓など、それ自体の表現力が直接的に「ここ」という場所を示しており、死者がその場に存在しているということを保証する、場所の記憶として捉えられるものである。もう一方は、失われたものを記号によって代理表象する現代的なモニュメントである。これはある場所に固有のものではなく、伝達しなければならないものをどこでも表現することができる（アスマン 2007：386-388）。すなわちモニュメントは、ある場所に縛り付けられて直接的に場所の記憶を伝えるものと、記号と結び付けられた象徴としてどこにでも存在しながら特定の記憶の想起を可能にするものがある。

しかし、そうした記憶の場に紐づけられた集合的記憶は、変わらないものだろうか。記憶の再構成を未来を意味づける行為と説明する石田の発言に寄るならば、むしろ変わるものと考えることができる。本稿では、集合的記憶が継承されている例として、ハワイへの日本人移民が建てたモニュメントを事例に議論し、その後モニュメントそれ自体が不在化させられることを事例に集合的記憶の交渉について検討する。そして、モニュメントを通じて観察される集合的記憶のダイナミズムについて考察する。

3. ハワイの移民のモニュメント

本章では、ハワイ日本人移民の慰霊碑をモニュメントの事例として検討する。ハワイ社会にとって日系アメリカ人は、人口の半数近くを占めていること以外にも、明治元年（1868年）から移民労働者として産業を支えてきたという背景をもつ、非常に大

きな存在である。食文化や生活習慣にも、日本文化が色濃く残っており、ハワイ特有の多文化社会の形成に多大な影響を及ぼした。かれらは、ハワイへの日本人移民について、日本の歴史とは異なる集合的記憶を有している。

日本から初めてハワイへ渡った者たちは、明治元年に渡ったことから「元年者」と呼ばれている。しかし、かれらは、正式に日本政府の認可を得てハワイへ渡ってきたわけではなかった。さらに、元年者の多くはプランテーションでの労働に向かず、契約期間を満了することができなかった。当時のハワイ王国は、元年者の受け入れは失敗であったとし、その後は、元年者の苦い経験を受けて、田舎生活に慣れており、過酷な労働に耐えることができる者を希望するようになった。そうして、1885年から約10年間の間にハワイへ来たのが官約移民である。その結果、日本において、最初のハワイへの移民は、官約移民だとされることが多い。しかし、ハワイの日系移民にとっては、自分のたちの土台を築いてくれた「厳しいプランテーション生活を耐え抜いた1世」が重視されている。それぞれの個人が考える1世は元年者や官約移民に特定可能だが、日系人の生活の土台を作った1世はそれらの集合体として語られることが多い。そしてそれは現在にも、プランテーションでの労働生活における「我慢」や「努力」といった語によって語り継がれており、過酷な生活を送った1世の存在があるからこそ今の自分たちがいる、といった受け止め方がされている。そのため、最初にハワイに来た日本人である元年者、そして過酷なプランテーション生活を生き抜いた官約移民は、特別に区別されることなく「厳しいプランテーション生活を耐え抜いた1世」という括りで重視されているのである¹。

初期の移民のことを讃える慰霊碑は、オアフ島内にいくつか存在している。ハワイ州オアフ島のマキキ地区にあるマキキ墓地の敷地内には、「明治元年渡航者の碑」(写真1)、「鎮魂碑」²(写真2)と「ハワイ日本人移民慰霊碑」(写真3)が祀られている。

「明治元年渡航者の碑」は、1927年に元年者の一人が亡くなった際に、日本語新聞「日布時事」の社長や当時の日系社会の指導者によって建立された碑である。マキキ墓地は日本からやってきた移民労働者達の中でも、身寄りのない者の墓が放置されていたことを受けて作られた共同墓地である。お盆には毎年法要が行われているが、元年者、官約移民などを含む日本人移民の寄せ墓であるため、マキキ墓地では、元年者と官約移民とを「厳しいプランテーション生活を耐え抜いた1世」として想起することが可能なのである。また、初めて日本人がハワイに到着してから150年経った2018年には、ホノルル市庁舎前の日本庭園を思わせる空間に「元年者の石碑」(写真4)が建立された。

¹ 言葉や生活の中に見られる集合的記憶についての詳細な民族誌は、紙幅の都合上別稿にて議論する。

² これは、官約移民を対象にした鎮魂碑である。



写真 1.2.3 (左から) 2022/7/25 前田撮影



写真 4.5. 2022/8/15 前田撮影

これら石碑の事例は、日系人が持つ移民労働者の経験という集合的記憶は、自分たちの生活の土台を作ってくれたことに対する感謝や尊敬の気持ちを纏いながら現在まで非常に肯定的な形で遺されていることを示している。また、「明治元年渡航者の碑」や「元年者の石碑」のように元年者を敬う碑を建立することは、日本の歴史の文脈では官約移民の存在によってかき消されてしまう元年者の記憶を遺すことでもある。これは、ノラの論じる「歴史が一掃してしまう記憶を遺すこと」だと解釈することができる。現在の日系人が、元年者が一番初めの日本人移民であると共通した認識を持つことができているのは、日本人移民に関する記憶の場が元年者を含む1世を基準に始まっているからである。

ハワイの日系人は、「自分たちの先祖が移民労働者としてサトウキビプランテーションで過酷な労働生活を送った」という集合的記憶を持っており、過酷な生活を送った移民1世の存在を非常に肯定的に受け止めている。そして、その記憶は、「明治元年渡航者の碑」や「元年者の碑」、「鎮魂」といったモニュメントのもとで想起され、現在もなお継承され続けている。

ここまで、墓地や石碑などを通して、現代において表象されるハワイにおける日系移民の集合的記憶についてみてきた。アルヴァックスが指摘する通り、記憶はその社会が有する枠組みに支えられている。また、ノラはユダヤ人であることとは、ユダヤ

人であることを想起することに他ならないと述べる（ノラ 2002：44）。ハワイの日系人は、かれらの存在が現在のハワイ特有な多文化社会の形成につながっているという強いアイデンティティとともに、その土台を整えた「厳しいプランテーション生活を耐え抜いた1世」という記憶を次世代に語り継いできた。また、それはモニュメントの存在やその新たな設置、盆の法要によって頻繁に再生産される。記憶の場は、記憶を共有する存在を作り出すとともに、その集合的記憶を表象する機能をもつものといえるが、こうして元年者と官約移民を中心とする日系人の集合的記憶は継承されているのである。

4. 撤去されるモニュメント

これまで、ノラやアスマンが指摘する記憶の場について、ハワイの日系人を対象に議論してきた。たしかに、モニュメントは人々のまとまりを作り出し、共通の歴史を想起することを可能にしていた。しかし、モニュメントをめぐることは、それが建立されることや、そこに残されていることだけではなく、その場所から取り除かれることについても考える必要があるだろう。なぜなら、モニュメントにまつわる意味づけや解釈がその社会が有する枠組みに支えられているのだとするならば、社会状況の変化などによって、その存在意義が問われることがあるからである。

ミルズは、ある特定の歴史的事実が集合的記憶から排除され、確固たる一つの歴史として成立したとみなされるのは、数世紀に及ぶ白人の支配と抑圧によるものとした。そして、カウンターメモリー（counter-memory）という概念を提出し、支配的な社会に属さない人々によって作り出される記憶の存在を指摘した（Mills 2007）。そうした記憶のあり方が象徴的に現れたのが、ブラックライブズマター（Black Lives Matter）運動の際に各地で倒壊され、撤去された銅像であろう。たとえば、イギリスでは、奴隷商のエドワード・コルストンの像が川に投げ捨てられ、イタリアではエチオピアの12歳の少女を妻として「購入」したインドロ・モンタネリの像が落書きされた（Pesarini & Panico 2021）。そのほかにも多数の例はあるが、ここではその中でも、倒壊させられたものや落書きされた例ではなく、撤去されたものについて取り上げたい。

ニュージーランドの都市ハミルトンは、地元の会社の設立75周年記念の際に、その都市の名前の由来となったイギリスの海軍大佐ジョン・フェイン・チャールズ・ハミルトンの像の寄贈をうけ、2013年からそれを市民中央広場に設置していた。しかし、2019年11月には、地元の先住民であるマオリのコミュニティの間で撤去の可能性が模索されるようになり、2020年6月12日に、ハミルトンの地方自治体はマオリからの要請に基づいて撤去した（Te Ao Māori 2020）。ハミルトン像は、アスマンのいうところの記号化された象徴としてのモニュメントと場所の記憶を保持するモニュメント両方の性質を兼ね備えているといえよう。

一方、何かを記念するために建てられたモニュメントではないにもかかわらず、ブラックライブズマター運動の興隆のなかで撤去されたものもある。それが、オーストラリア北東部の地方都市ケアンズにある、中心部に程近い場所に1972年に建造された10m程のジェームズ・クックの像である。クックは太平洋の調査航海を実施し当地域への植民地支配のきっかけを作ったイギリスの探検家であるが、これは彼を記念して造られたモニュメントではなく、どちらかという、マスコットの像に近かった。のちに所有者が変わると、その像の側には彼の名を冠した宿泊施設も建てられた。以来およそ50年ものあいだ非先住民を中心とする地元民や観光客に、町のアイコンとして親しまれてきた (Schlunke 2013 : 258)。

この像を撤去するか否かの議論は、ブラックライブズマター運動以前、ジェームズ・クック大学が、大学病院関連施設の建築のために像の建っている敷地を買い上げたことに端を発する。しかしそれが幅広い層を巻き込んだ論争となったのは、ブラックライブズマター運動の影響によるところが大きく、クック像撤去を望む署名は19,000名にまで上った。興味深いことに、約50年ものあいだそのままにされてきたにもかかわらず、批判の対象となったのは、その像がクックであることだけではなく、そのポーズであった。このクック像は右腕を伸ばし斜め上に掲げるような姿をしている。ジェームズ・クック大学の歴史学の講師であるジャン・ウェグナーは、その姿勢はクックが、アポリジニに槍を投げつけられそうになったのを止めようとしている姿勢を模したものと新聞記者のインタビューに回答している。しかし、像撤去派は、それがナチスの敬礼の姿勢を彷彿とさせるとして撤去を求めた (ABC Far North News 2020)。結局像は2022年3月に撤去されたが、取り壊されることなくわずか1ドルで売却された。新しい所有者は新たな設置場所を探しているという (9News 2022)。

ジェームズ・クックは、ブラックライブズマター運動以前から、入植者を祖先とするヨーロッパ系オーストラリア人にはオーストラリア大陸を「発見」した「英雄」とみなされ、先住民社会ではこの大陸に植民地支配をもたらした「悪魔」のようにみなされてきた。先住民社会における記憶は、典型的なカウンターメモリーの例といえる。そうした両極端な歴史解釈があるにもかかわらず、ジェームズ・クックは絵画やモニュメント、マスコットの題材になってきた。本事例の巨大なクック像も、彼の業績を記念して建てられたモニュメントではなく、町のアイコン的な要素の強いものである。にもかかわらず、ブラックライブズマター運動を契機として像は撤去されるに至った。

シュルンケは、ビッグ・バナナなどオーストラリアの地方都市に典型的な巨大な像、ビッグ・シングス (Big Things) に関するバルカンの「歴史的なビッグ・シングスのいくつかは、ヒストリーメイキングのはたらきを公共の彫像や真面目な記念碑から奪っている」という指摘を引用しながら (Barcan 1996 : 31)、このクック像はそのビッグ・シングスの一種であり「真面目なモニュメントとはいえないが、その感情的な物質性が、強力な記憶あるいは強い記憶作用を生み出しているのだろう」と述べている

(Schlunke 2013 : 259)。バルカン、シュルンケの指摘からもわかるように、たとえそれがクックを公式に賞賛する、バルカンの言うところの、ヒストリーメイキングをするモニュメントではなくても、その巨大さ、型取られた彼の姿は、クックの所業と歴史におけるその存在感を十分に想起させるものであった。そうした意味では、アスマンが指摘する、失われたものを代理表象する記号化されたモニュメントの性格が強かった。むしろ、クックという記号が想起させる記憶が、逆説的にこの像をモニュメントにしたといえよう。クック像はもとより両極端に解釈されてきた存在ではあったが、ひとたび負の記憶をより強く想起させるものとして捉えられると、像のポーズまでもが、本来は関係ないはずのナチスの敬礼という、さらなる負の記憶を想起させる記号として解釈され、最終的には撤去に至った。

5. 考察

集合的記憶とは、それを提唱したアルヴァックスによれば、人々がまとまりをもつことができる基盤の一つである。本稿では、モニュメントを通じて観察される集合的記憶について議論してきた。ここでは、人々のまとまりの範囲とは何なのかを議論したい。

モニュメントは、集合的記憶を作り出すこと、そしてそれを共有し、さらに継承することに強く貢献しているものと考えられてきた。ハワイの日系人は、「厳しいプランテーション生活を耐え抜いた1世」に対して強い敬意を共有しており、ノラやアスマンの議論に似た状況を指摘することができた。しかし、モニュメントを通して誰が何を想起するのかは、常に一定であるわけではない。

アスマンが述べるように、モニュメントには、ある場所を直接的に示すものと、記号と結びついた象徴となるものがある。そうした役割を持っていることから、モニュメントはしばしば国家の象徴や栄光を語り継ぐものとして機能してきたが、特定の記号との結びつきは現代社会においては自明でなくなっている。なぜなら、その記号と結びつく人が多様になってきたからである。オーストラリアのクックの像は、マスコットの的に用いられていたというが、それが負の歴史を象徴するモニュメントと見做される様になり、さらに負の歴史という観点から、ナチスの敬礼に似ているとまで言われるようになった。このとき、モニュメントは何か固定的な集合的記憶を生み出す媒介ではなく、連想ゲーム的な記憶の想起を生み出すきっかけとなっている。また、ジョン・ハミルトンの像は、それを設置した側からすれば、土地の開拓やイギリスからの移民の成功などを意味するものであったといえる。一方で、地元のマオリのコミュニティ側にすれば、彼は先祖を虐殺し、土地を奪った人である。ここでは、ハミルトン像が栄光の象徴の像なのか、負の歴史を想起させる像なのかという、問題含みな対立を見ることができる。

モニュメントは人為的に作られるため、その設置には、設置者および団体の意向を強く反映する傾向にある。そのため、モニュメントの存在そのものに強いメッセージ性があり、そのメッセージを設置者の希望通りに受け取らない人々にとっては、脅威になりうる。モニュメントの破壊や撤去には、そのモニュメントについて相反する集合的記憶があることを示しており、だからこそ、怒りの表現として破壊を説明づけることは比較的容易にできる。しかし、モニュメントの破壊ではなく合意に基づく撤去の場合、それは単に相反する集合的記憶の存在を意味するものではなくなっている。

モニュメントを作る/撤去するという行為は、その執行者がどのような集合的記憶を表象しようとしているのかを示す行為であるといえる。ハミルトン像やクック像の撤去は、その像が「植民地的な権力を表象するということが問題である」という共通の理解が、いわば「公的な想起」として認められた、ということである。近年、負の歴史について謝罪や和解を目指す国家や団体が少なくない。モニュメントの撤去は、そうしたことを経て、集合的記憶の結合とも呼べる現象が起こっていることを示している。負の歴史を負であったと認めること、負の歴史であったことを認めてもらいその補償や改善を求めた受け取ることで、加害者と被害者の間をつなぐ集合的記憶が生成される可能性もあるのである。

ただ、これらの像の撤去の議論は、ブラックライブズマター以前からあったにもかかわらず、それが具体的な行動には移らなかった。それは、栄光の像や、あるいはマスコットとして、街のアイコンや名物としての像という認識が強かったからであろう。それがブラックライブズマターを通して、像の破壊という具体的な行動を起こせるだけの人々が集まり、像が負の歴史を表象するものとして注目を集め、「公的に」認知されるようになった。そして、その認識がメディアやデジタル空間を通して一気に広がったことで、これらの像について具体的な「撤去」という流れに移ったと考えられる。ここでは、ハワイの慰霊碑とは異なり、像が何かの記憶を表象しているということ自体が「公的な想起」として認められていなかったようにもみえる。それが、ブラックライブズマターを経てヒストリーメイキングのモニュメントとして認識されるようになることで、その存在が現在の社会的枠組みに基づいて解釈され、撤去という合意に至ったと考えられる³。

6. おわりに

本稿では、集合的記憶について、モニュメントを通して共有され、継承されるものがある一方で、モニュメントの破壊や撤去に見られるような記憶の交渉の可能性があることについて検討した。ノラは、『記憶の場』で、「この本は、フランスについて知

³ ただし、必ずしも設置者と合意に至ったわけではない点は注意する必要がある。

るべきことの一覧であり、「アイデンティティを植え付ける物語」(ノラ 2002 : 50) と述べ、モニュメントを含む記憶の場と国家や国民との強い関係を示唆している。しかし、集合的記憶の交渉の事例に見られるように、現代社会において、ナショナリストイックに、「集合」を「国民」と捉えることは必ずしも的確なこととはいえない。

ハワイの日系移民は、「厳しいプランテーション生活を耐え抜いた1世」の子孫という記憶と、かれらの存在が現在のハワイに特有の多文化社会の形成につながっているという自負を、ハワイの日系人という集合としてのアイデンティティとして語り継いできていた。一方、先住民については、カウンターメモリーに見られるような、主流派とは異なる形式の集合的記憶を持っていることが指摘されている。そのため、かれら先住民としての集合を、国家や国民とは異なる形式において持っていると考えられてきた。ただ、ハミルトン像やクック像の事例からは、被支配者であるマオリやアボリジニだけでなく、主流社会側も撤去に合意している。それは、像にまつわる集合的記憶について、支配者と被支配者の間で同様のことを想起し、それを問題視することが可能になったからだといえる。それぞれの民族や主流社会という集団をまとめ上げている可能性のある集合的記憶が、交渉を通じてこれまでとは異なる方法で認識され、それがいわば現在の「公的な想起」として認知されている。

こうした記憶の交渉をめぐるダイナミズムは、負の歴史を対象とした先住民やマイノリティに対する謝罪や和解についても見られるはずである。今後はいつ、どうやって加害者と被害者、支配者と被支配者との間で新しい集団的記憶が構築されていくのか、そのとき加害者や支配者の記憶がどのように作られ継承されていくのかにも注目したい。

<謝辞>

本稿は、神戸大学国際文化学術研究推進インスティテュートの2022年度共同研究プロジェクト「『負の遺産』の複層性をめぐる人類学的研究」(研究代表：土井冬樹)および2023年度移民研究プロジェクト「移住に伴う集合的記憶の生成と継承」(研究代表：土井冬樹)の成果の一部である。東京外国語大学の片岡真輝氏から草稿に貴重な助言と指摘をいただいた。全てに対応することはできなかったが、部分的な加筆修正を行った。記して感謝申し上げる。

<参考文献>

アスマン, アライダ

2007 『想起の空間——文化的記憶の形態と変遷』 安川晴基訳 水声社.

アルヴァックス, モーリス

2018(1925) 『記憶の社会的枠組み』 鈴木智之訳 青弓社.

石田 雄

2000 『記憶と忘却の政治学——同化政策・戦争責任・集合的記憶』 明石書店.

ノラ, ピエール

- 2002 『記憶の場——フランス国民意識の文化=社会史』 谷川稔訳 岩波書店。
 浜日出夫
 2010 「記憶と場所」『社会学評論』 60(4): 465–480。
 野家啓一
 1996 『物語の哲学——柳田国男と歴史の発見』 岩波書店。
 安川晴基
 2008 「『記憶』と『歴史』——集合的記憶論におけるひとつのトポス」『藝文研究』 94: 68–85。
- 9News
 (30 May 2022). Notorious Captain Cook statue 'will stand again', new owner promises. Available at: <https://www.9news.com.au/national/captain-cook-statue-new-owner-speaks-after-controversial-purchase-cairns/1d3f8d1e-f509-4c65-9505-0de808879144> (Accessed: 14 November 2023)
- ABC Far North News
 (17 June 2020). Cairns historian reveals origin of roadside Captain Cook statue's 'Nazi salute'. Available at: <https://www.abc.net.au/news/2020-06-17/cairns-captain-cook-statue-origin-records/12363260> (Accessed: 14 November 2023)
- Barcan, R.
 1996 Big things: consumer totemism and serial monumentality. *LiNQ* 23(2): 31–39. Available at: <http://search.informit.com.au.ezproxy.lib.uts.edu.au/fullText;dn=970707180;res=APAFT>
- Lennon, J. J., & Foley, M.
 1999 Interpretation of the Unimaginable: The U.S. Holocaust Memorial Museum, Washington, D.C., and “Dark Tourism.” *Journal of Travel Research* 38(1): 46–50. <https://doi.org/10.1177/004728759903800110>
- Mills, C.
 2007 White Ignorance. In S. Sullivan & N. Tuana (eds) *Race and Epistemologies of Ignorance*, pp. 11–38. SUNY Press.
- Pesarini, A., & Panico, C.
 2021 From Colston to Montanelli: public memory and counter-monuments in the era of Black Lives Matter. *From The European South* 9: 99–113.
- Schlunke, K.
 2013 Memory and materiality. *Memory Studies* 6(3) 253–261.
- Te Ao Māori.
 (12 June 2020). Controversial statue of Captain John Hamilton has been removed. Available at: <https://www.rnz.co.nz/news/te-manu-korihi/418833/controversial-statue-of-captain-john-hamilton-has-been-removed> (Accessed: 14 November 2023)
- Tuan, Y.-F.
 1977 *Space and Place: The Perspective of Experience*. University of Minnesota Press.